

# 昔話にみられる日本人や伊豆の人々の

## 精神構造に関する一考察

～『うぐいすの里』、『鶴女房』、『火男』の類話比較を中心に～

### 1. はじめに

臨床心理学者の河合隼雄（1982）『昔話と日本人の心』によれば、日本人に古くから親しまれてきた昔話には日本独特の西洋とは違う自我の意識が現れており、構造的にも違いがみられるという。日本で古くから馴染みのある『鶴の恩返し』のような「見るなの禁止」型の物語について西洋の類話と比較してみると、西洋では覗いてしまう部屋の中は死を連想させるものが多く、覗いてしまうのは例外なく女性であるという。禁を犯した者は罰を受け、その罰から女性を救い出す他の男性が登場し、幸せな結婚に結びつくのがおおよその結末となっており、「結婚(人格の統合)」が大事にされている。一方、日本では、部屋の中は繊細な美や自然の美を象徴するものが多く、男性が禁を犯し、その後で女性は悲しみに暮れながら去っていき、禁を犯した方はもとのままとなり、「出会いと別れを繰り返して循環する(無が生じて調和が保たれる)こと」が大事にされているという。また、動物が人間となって恩返しをする行動は西洋ではほとんど例がない。『おむすびころりん』のような「報恩」型の物語について見てみると、西洋には似たような物語がまずない。西洋にあるのは「欲」がありすぎると全て失うという話で、日本のように「欲」と「無欲」のバランスが取れた物語はほぼ無いに等しい。

このような、西洋にはない日本特有の昔話の構造は、河合が述べるように日本人の精神構造に影響を与えているのではないかという前提に立ち、私たちが住む伊豆地方に伝わる昔話についても、日本全国に分布する様々な昔話と同様、日本人特有の精神構造の特徴がみられるであろうと仮説を立てた。また、伊豆の昔話を細かく見ていくと、その風土などに基づいて一般的な日本の昔話とは微妙な構造の違いがあるものも存在するのではないかという仮説も併せて立てた。

### 2. 研究目的および方法

本研究では、河合（1982）が示した日本人特有の精神構造が伊豆の昔話にも同様にみられることを追

認検証する。その上で、日本人の精神構造の特徴が比較的明確に表れているとされる日本の代表的な昔話『うぐいすの里』、『鶴女房』、『火男』の3作品に焦点をあて、その類話と、伊豆に伝わる類話とを比較し、共通点と相違点を挙げて考察する。伊豆の昔話に特徴があるとすれば、それはどういう形をとり、どのような意味を持つのかについて、できるだけ多角的に考察しようと試みた。また、あわせて外国と日本、日本と伊豆の昔話を読み聞かせられて育つ子どもたちの自我形成において、どのような精神的影響の差を与えているのかについても、教育的、保育的な面から考察を試みることを、本研究の目的とする。

また、本研究を進めるにあたって、まず始めに先行研究である河合隼雄（1982）『昔話と日本人の心』で河合が示した日本の昔話の心理学的な分類を参考にした。この本から本研究で焦点をあてた『うぐいすの里』、『鶴女房』、『火男』の3作品において、伊豆に伝わる類話が『日本昔話大成』（1978 他）に存在することが確認できたので、その類話を調査分析した。『日本昔話大成』には昔話の類話の中でも比較的に整った話が示され、また、全国の類話の分布とその相違点も示されていた。『日本昔話大成』に存在した伊豆に伝わる類話には、比較的整った話との相違点のみが示されていた。そのため、伊豆に伝わる類話の全文が載っている鈴木暹編（1975 他）『伊豆の昔話』（1975 他）と松原正明（1994）『新版 静岡伝説昔話集』も調べた。これらの資料から採集された昔話は、河合が作成した全国に分布する類話の内容を比較する表に倣って、伊豆の昔話の内容比較表を作成した。

また、考察の際に、伊豆の風土（自然災害や伊豆半島の成り立ち）や歴史について、伊豆半島ジオパーク推進協議会の研究員や伊豆の国市歴史編纂委員を務める本校教員に話を聞くなどした。

### 3. 結果と考察

#### （1）『うぐいすの里』

『うぐいすの里』は日本の典型的な禁止の昔話の1つである。以下にあらすじを述べる。

あるところに住んでいた木こりが森へ行くと、今まで見たことも無い立派な館があった。そこには美しい女がいた。木こりは館に通され、美しい女に留守を頼まれる。その時、次の座敷を覗いてくれるなど言い残す。しかし、木こりは禁を破り、その座敷を覗いてしまった。そこは花の香に満ちていた。木こりはそこで3つの卵を見つけ、その卵を誤って割ってしまった。帰ってきた女は、泣きながら男に「人間ほど当てにならぬものは無い。あなたは私の3人の娘を殺してしまった。娘が恋しい。ほほほけきよ。」と言って鳴き、うぐいすとなって飛んでいってしまった。ふと気がつくと館はなく、木こりは野原に立っていた。

この話は大きくわけて次の柱から成り立っている。

1. 女が男に次の座敷を見てはいけないという禁止をする。
2. 男が禁止を破る。
3. 女はその地を去るが、男はもとのままとなり、無が生じる。

表 1-1 は河合（1982）がまとめた『うぐいすの里』の類話である。また、表 1-2 は上記の柱に当てはまる話を伊豆の昔話から私たちの調査により採集したものである。

## ① 伊豆に見られる類話と『うぐいすの里』との共通点と相違点

### 1) 『人間になりそこねた鷺』(賀茂郡竹麻村)

#### 共通点

- ・女が男に座敷を覗くなどという禁止をし、男がそれを破る。
- ・女は去っていき、男はもとのままとなる。

#### 相違点

- ・男が美しい娘に結婚を申し込む。
- ・3年間覗いてはならないと言われ、あと60日のところで覗く。
- ・座敷の中では娘が経を読んでいる。

### 2) 『見るなの座敷』(修善寺町柏久保)

#### 共通点

- ・女が男に座敷を覗くなどという禁止をし、男がそれを破る。
- ・女は去っていき、男はもとのままとなる。

#### 相違点

- ・物売りの男が見慣れない丸まげの奥さんについていく。
- ・禁止された部屋を覗くと、水瓶に水が溜まっていて、男は全て飲んでしまう。
- ・次の部屋を覗くと、不思議な木に大きな実がたくさん生っていて、触るとはぜ、すべてなくなる。

### 3) 『とよたまひめ』(修善寺町柏久保)

#### 共通点

- ・女が男に座敷を覗くなどという禁止をし、男がそれを破る。
- ・女は去っていき、男はもとのままとなる。

#### 相違点

- ・ほおりのみことのもとにわだつみの宮からとよたまひめがやってきて、2人の間に赤ちゃんができる。
- ・お産をするから見ないでほしいと言われたほおりのみことが座敷を覗くと、大蛇がお産をしている。

### 4) 『食わず女房(1)』(戸田村舟山)

#### 共通点

- ・女が男に座敷を覗くなどという禁止をし、男がそれを破る。

・女は去っていき、男はもとのままとなる。

**相違点**

- ・1人の男のもとに娘がきて、ご飯は食べないから私をもらってほしいといい、男と暮らす。
- ・2人の間に子供ができ、お産するから見ないでほしいと頼まれるが、覗いてしまいそこでは大蛇がお産をしている。

5) 『蛇女房』(葦山町奈古谷)

**共通点**

- ・女が男に座敷を覗くなという禁止をし、男がそれを破る。
- ・女は去っていき、男はもとのままとなる。

**相違点**

- ・国清寺の小坊(こんぼ)さんが国清寺の下にある池のそばの丘へ行き、きりょうのいい娘さんにあって仲良くなり、夫婦になる。
- ・子供ができて、娘がふすまを閉めてお産をしているところをそのお坊さんが覗いてしまい、見ると大蛇がお産をしている。
- ・去る時、自分の目玉を抜き、子供が泣いたらこれをしゃぶらせるようにとお坊さんに渡す。

表 1-1 『うぐいすの里』の類話

	採集地	禁を犯す者	禁じる者	場所	見るな座敷	座敷の中	結末
1	岩手県 上閑伊 郡	若い樵 夫	美しい女	野中の森	次の座敷	宝物、鶯の 卵を割る	女は鶯となって去る 男はもとのまま
2	山形県 最上郡	茶屋の 番頭	きれいな 姉さん	野原の中	十二座敷	1年の行事	鶯の鳴き声 男はもとのまま
3	長崎県 南松浦 郡	男	女(プロ ポーズ)	山の中	東の蔵と西の 蔵	梅に鶯	鶯がとび立つ 男はもとのまま
4	香川県 丸亀市	旅人	美しい娘	道に迷う	2つの蔵の内 の1つ	鶯	娘は鶯となる 男はもとのまま
5	鳥取県 東伯郡	商人	娘(プロ ポーズ)	街道筋	12番目の奥の 蔵	梅に鶯	女は男を追い出す 男はもとのまま

6	鳥取県 西伯郡	木こり	女	道に迷う	4つ目の蔵	稲の成長段階	女は白さぎになる 男はもとのまま(4年経過)
7	岐阜県 吉城郡	男	若い女	山奥	裏の蔵	梅に鶯	女はホーホケキョと 鳴いて去る
8	山梨県 西八代 郡	2人の 炭焼き	娘	道に迷う	箆筒	稲の成長段階	女は悲しみ残念がる 男はもとのまま
9	新潟県 長岡市	男	女	かや野	7番目の蔵	梅に鶯	女は鶯となる 男はもとのまま
10	新潟県 西蒲原 郡	木びき	女(プロ ポーズ)	山奥	12番目の座敷	山の神の座敷	女は鶯となる 男は爺となる
11	新潟県 板尾市	男	きれいな 娘	山奥	2番目の座敷	梅に鶯	女は鶯となる 男はもとのまま
12	福島県 いわき 市	旅人	若い女	野原	4番目の座敷	梅に鶯	女は鶯となる 男はもとのまま
13	岩手県 花巻市	若者	女(鶯の 報恩)	山に迷う	奥の座敷	卵を割る	女は鶯となる 男はもとのまま
14	静岡県 賀茂郡	男(プロ ポーズ)	美しい娘	りっぱな 邸	3年間娘の姿 を見るな		女は鶯となる 男はもとのまま
15	福島県 南会津 郡	母	息子	自宅	座敷	息子が羽を ひろげて寝 ている	息子はどこかへ去る
16	山形県 最上郡	若い旅 の和尚	若い女	旅先の宿	12番目の蔵	大雪	女は飛んでゆく 和尚は吹雪で死ぬ
17	岩手県 下関伊 郡	女	女	薪とり	13番目の部屋	鶏がいる	禁を犯した女は鶏に なる
18	静岡県 磐田郡	娘	男	旅先の宿	3番目の蔵	竜(男の父)	2人は結婚する

※河合隼雄 (1982) 『昔話と日本人の心』 pp.6-7 による

※表 1-1 の 14 と表 1-2 の 1 は同じ話である

表 1-2 伊豆にみられる『うぐいすの里』の類話

	題	採集地	禁を犯す者	禁じる者	場所	見るなの座敷	座敷の中	結末
1	人間になりそこねた鶯	賀茂郡竹麻村	男(プロポーズ)	美しい娘	りっぱな邸	3年間娘の姿を見るな		女は鶯となる 男はもとのまま
2	見るなの座敷	修善寺町柏久保	物売りの男	丸まげの奥さん	立派な家	奥の座敷	水瓶に入れた水 大きな実のなる不思議な木	女は鶯となる 男はもとのまま
3	とよたまひめ	修善寺町柏久保	ほおりのみこと	とよたまひめ	不明	とよたまひめがお産をする産室	大蛇のお産	女は蛇となって去る 男はもとのまま
4	食わず女房(1)	戸田村舟山	1人の男	娘	男の家	娘がお産をする部屋	大蛇のお産	女は蛇となって去る 男はもとのまま
5	蛇女房	韮山町奈古谷	小坊(こんぼ)さん	きりょうのいい娘	国清寺	娘がお産をする部屋	大蛇のお産	女は蛇となって去る 男はもとのまま

※表 1-2 の 1 は松原正明(1994)『新版 静岡伝説昔話集』(下巻)p.171,羽衣出版による

※表 1-2 の 2 は鈴木暹編(1975)『伊豆の昔話』第二号 p.2 長倉書店による

※表 1-2 の 3 は鈴木暹編(1975)『伊豆の昔話』第四号 p.2 長倉書店による

※表 1-2 の 4 は鈴木暹編(1976)『伊豆の昔話』第八号 p.9 長倉書店による

※表 1-2 の 5 は鈴木暹編(1975)『伊豆の昔話』第一号 p.3 長倉書店による

## ② 伊豆にみられる『うぐいすの里』類話の考察

伊豆にみられる『うぐいすの里』の類話を調べてみると、女が禁止し、男がそれを破り、女は去って男はもとのままになる、という点に関しては全国の類話と共通しているように思われるが、鶯の代わりに蛇が用いられていたり、子供を置いていたりして、必ずしも鶯のモチーフに象徴されるような、幻想的な美の世界と無への帰結が象徴されているようには感じられない。特に、人間の姿となって現れる動物が鶯ではなく蛇に置き換えたものが幾つか見られ、さらに、伊豆の他の昔話にも蛇を題材にしたものが目についたことは、伊豆の昔話の特徴と考えて良いのかもしれない。

では、なぜそのような民話が数多く存在するのだろうか。今回は伊豆の風土や歴史にその理由を探そ

うとするのではなく、むしろ自然条件としての地学的な見方でアプローチしてみたい。

伊豆半島はフィリピン海プレートにのっており、おおよそ100万年前に南から本州に衝突したため、地層が曲がりくねったものが多くみられる。その地層の形が蛇に似ていて、馴染み深いからだという説が考えられる。海に面した岩壁を、かつてマグマが貫いてできた帯状の岩脈があり、地学では「蛇下り」と呼ばれる。崖の断面には、岩脈を作ったマグマが冷え固まるときにできた、蛇のうろこのような柱状節理がみられる。もし、その地層の形が曲がりくねっていて、断面がうろこのようだというだけであるならば、龍や鰻などと捉えることもできてしまう。それでもその形を蛇と捉えたのは、昔から土砂崩れや地震などの自然災害が多い土地で、人間に危害を与える曲がりくねった地層をマイナスのイメージを持つ蛇と重ねていたからではないかと考えた。また、伊豆には蛇がつく地名が以下のようにある。

静岡県伊豆市 蛇喰川（じゃばみがわ）

静岡県賀茂郡 南伊豆町 蛇石（じゃいし） 西伊豆町 蛇島（じゃしま）

静岡県賀茂郡 松崎町 蛇石峠（じゃいしとうげ）

このことから曲がりくねった地層、つまり活発な地震活動や火山活動に悩み苦しめられながら生き延びてきた伊豆半島の人々にとって、蛇は、例えば恐ろしい土砂崩れをイメージさせる、恐れ、畏れるべき存在として、美しく無に還るわけにいかない厳しい条件を意識させ続けるために、敢えて鶯の代わりに蛇を置き換えた可能性を示唆していると考えた。

また、伊豆には『甲人の塔』や『三宅記』といった大蛇討伐の伝説がある。いずれも大蛇は人間に危害を及ぼすものとされている。もちろん、蛇はプラスのイメージとして、音楽、豊穰、蓄財など多くの分野において神の使いとされていたり、長期間エサを食べなくても生きていけることから、生命力の象徴とされたりもしている。現代では、蛇が脱皮をするたびに表面の傷が治癒していくことから医療、治療、再生のシンボルともされている。

しかしながら、今回、伊豆で見つかった3つの『うぐいすの里』の類話の蛇が登場する物語は、全て、大蛇が去って完結していることから、昔の伊豆の人は大蛇が去ることを災害が減る、なくなることと捉え、人々を苦しめる災害がなくなることを願っていたのかもしれない。

## （2）『鶴女房』

『鶴女房』も『うぐいすの里』と同様に典型的な昔話の1つである。以下にあらすじを述べる。

昔、おじいさんとおばあさんが住んでおり、おじいさんが町に薪を売りに行った際、畏にかかった鶴を見つけ、助ける。ある夜、おじいさんの家に美しい娘がやって来る。娘は家に泊まり、部屋を覗くなど言い残し、泊めてくれたお礼に布を織る。その布は大変美しく、町で評判となったため、夫婦は好奇心から部屋を覗いてしまう。そこには1羽の鶴がおり、正体が発覚してしまった鶴は空へと帰る。

『鶴女房』も『うぐいすの里』と同様に禁止を破る話であるが、成り立っている柱に違いがみられる。その柱は次の通りである。

1. 何らかの禁止の形がある。
2. 禁を犯した結果、女性が悲しみの中で去っていき、禁を犯した者はもとのままである。
3. 助けられた者は助けた者に対して、恩返しをする。

上記に当てはまる話が伊豆にも存在する。

## ① 伊豆にみられる類話と全国の『鶴女房』との相違点

### 1) 『鶴女房』(修善寺町柏久保)

#### 共通点

- ・娘が部屋を見るなど禁止をする。
- ・部屋を見られた娘は鶴になって帰る。
- ・娘が助けてくれたお礼に布を織る。

#### 相違点

- ・娘を助けた人物が若い男である。

表 2-1 全国の一般的な『鶴女房』と伊豆の類話

	女性の本性を告白	女性の禁止	子ども
一般的な『鶴女房』	あり	部屋を覗くな	なし
伊豆の『鶴女房』	あり	部屋を覗くな	なし

※表 2-1 の一般的な『鶴女房』は河合隼雄(1982)『昔話と日本人の心』pp.192-193 を参考に作成

※表 2-1 の伊豆の『鶴女房』は鈴木暹編(1975)『伊豆の昔話』第三号 p.2 長倉書店による

※この表からは全国で一般的な『鶴女房』と伊豆の『鶴女房』では話の構造に違いがみられない。

### 2) 『天人女房』(賀茂郡南伊豆町)

#### 共通点

- ・何らかの禁止があり、それを破る。

#### 相違点

- ・男が箱を覗くなど禁止をし、女が禁を破って箱を開ける。
- ・天人が天へ帰ったあと、男が財産を失うという結果が残る。

一般的な『鶴女房』と伊豆の『鶴女房』は同じ構成であったため、『天人女房』について深く掘り下げる。高木昌司(2013)によると、『天人女房』は3つの種類に分類され、全国にも『天人女房』の話が多く存在する。分類と全国の『天人女房』は下記の通りである。

1. 離別型：隠された羽衣を見つけ天女が飛び去る。
2. 天上訪問型：男が蔓を伝って天女に再会する。
3. 七夕結成型：天上で再会した後、瓜を割ったために洪水が起き、毎年7月7日に会う。



表 2-2 全国の『天人女房』類話と伊豆の類話

	題	採掘場	結婚	禁止の内容	女性の本性発覚	子ども
1	天人女房	鹿児島県 奄美諸島	あり	瓜を縦に切る な	もともと正体が発覚していた	2人
2	天人女房	山口県	あり	禁止なし	もともと正体が発覚していた	なし
3	羽衣伝説	島根県	あり	瓜を食べるな	もともと正体が発覚していた	男1人
4	天人女房	岩手県 和賀郡	あり	禁止なし	もともと正体が発覚していた	男1人
5	天人女房	秋田県	あり	禁止なし	途中で本人が言う	なし
6	天女の衣 掛柳	滋賀県	あり	禁止なし	もともと正体が発覚していた	男2人 女2人
7	羽衣伝説	京都府	あり	禁止なし	もともと正体が発覚していた	なし
8	打吹山の 天女	鳥取県	あり	着物を見たこ とを言うな	もともと正体が発覚していた	2人
9	天人女房	静岡県 賀茂郡	あり	箱を開けるな	最後に自分で明かす	あり (不明)

※表 2-2 の 1 は童話館『天人女房』〈<http://www.douwakan.co.jp/book/天人女房/>〉による

※表 2-2 の 2 は福娘童話集『天人女房(てんにんにようぼう)』

〈<http://hukumusume.com/douwa/pc/jap/06/09a.htm>〉による

※表 2-2 の 3 は高木昌司『天人女房/白鳥処女』〈[https://seijo.repo.nii.ac.jp/?action=repository action common download&item id=3149&item no=1&attribute id=22&file no=1](https://seijo.repo.nii.ac.jp/?action=repository%20action%20common%20download&item%20id=3149&item%20no=1&attribute%20id=22&file%20no=1)〉による

※表 2-2 の 4 はフジパン『天人女房』〈[https://minwa.fujipan.co.jp/s/area/iwate\\_014/](https://minwa.fujipan.co.jp/s/area/iwate_014/)〉による

※表 2-2 の 5 はフジパン『天人女房(絵姿女房型)』

〈[https://minwa.fujipan.co.jp/s/area/akita\\_026/](https://minwa.fujipan.co.jp/s/area/akita_026/)〉による

※表 2-2 の 6 は日本伝承大鑑『天女の衣掛柳』〈<https://japanmystery.com/siga/tennyo.htm>〉による

※表 2-2 の 7 は「舞い降りた天女、二つの『羽衣伝説』」

〈[https://www.westjr.co.jp/company/info/issue/bsignal/06\\_vol\\_107/feature03.html](https://www.westjr.co.jp/company/info/issue/bsignal/06_vol_107/feature03.html)〉による

※表 2-2 の 8 は鳥取県立博物館『打吹山の天女(倉吉市越中町)』

〈<https://www.pref.tottori.lg.jp/270744.htm>〉による(表 2-2 の 1~8 最終閲覧日: 2019 年 8 月 13 日)

※表 2-2 の 9 は南国伊豆観光推進協議会(1985)『南国伊豆の昔話』pp.87-91 社団法人下田青年会議所による

## ② 伊豆にみられる『天人女房』類話の考察

表 2-2 の通り、伊豆の『天人女房』は全国の類話である『天人女房』と比べ、異なる項目が多い。また、

伊豆の『天人女房』は長者(男)が家や召使いを失うというマイナスのイメージが連想される結果が残る。それは伊豆の『天人女房』が伊豆独自の構成から成り立っているものだからではないかと推測した。

伊豆の地形の歴史をたどってみると、841(承和8)年、伊豆で大地震(M7.0)が起これ、死者が多数出ている。また、864(貞観6)年には富士山が噴火している。これは伊豆の『天人女房』が成立した1200年前と年代がほぼ合致する。

また、奈良時代から平安時代、つまり『天人女房』が成立した時代に伊豆は「処刑の地」と呼ばれ、多くの貴族や僧侶が流罪となっている。例えば740(天平12)年、藤原良継は、兄の大宰少貳藤原広嗣が起こした反乱に連座した。また、741(天平13)年、小野東人は740(天平12)年に起きた藤原広嗣の乱に連座して、翌741(天平13)年になってから平城京内の獄舎に投獄され、平城京の東西の市の獄舎でとらわれた後、伊豆国三島へ配流された。さらに、842(承和9)年、橘逸勢は皇太子・恒貞親王の東国への移送を画策し謀反を企てているとの疑いで、伴健岑と共に捕縛され、伊豆に流された。そして、866(貞観8)年、伴善男は犯人として伊豆で死罪とされた、などである。その他、後の時代には源頼朝が1160(永暦元)年に伊豆に流されるなど、伊豆は流人が昔から多いことでも知られている。

また、地震や火山の噴火があった平安時代の伊豆は生活するには困難であり、人々の間でも避けられていた地であったと考えられる。伊豆が流罪の地となったのは厳しい自然環境を利用し、流罪者たちを伊豆に幽閉するためではないかと考えた。そして、そのような流罪の地としてのイメージがマイナスの思考へと変化し、物語にも負を連想させる結末として残ったのかもしれない。

### (3) 『火男』

『火男』は日本の典型的な「欲」と「無欲」の功罪、つまり「欲」を出した者が失敗し、「無欲」の者が成功する教訓を表した昔話の1つである。以下にあらすじを述べる。

あるところにおじいさんとおばあさんがいた。おじいさんが山へ柴刈りに行き、大きな穴を見つけた。おじいさんはその穴を塞ぐつもりで1束の柴を入れるが、それは穴の中に入ってしまふ。穴は思いのほか深く、3日分の柴が1束残らず穴に入ってしまふ。すると、若い女性が穴から出てきて柴の礼を言い、「一度穴に来てください。」と勧められて入ってみると、中には女性と白髭の翁、1人の童がいた。その童を連れて帰り、育てていくうちに、へそから金が出てくるのがわかった。しかし、欲張りなおばあさんが金の欲しさにへそを棒でつつくと、童は死に、元に戻ってしまう。

この話は大きく分けて3つの柱から成り立っている。

1. 対比された「無欲の善人」と「強欲な悪人」が登場する。(隣の爺婆型)
2. きっかけの人物から何かを与えられて話が展開していく。
3. 「無欲の善人」はハッピーエンドになり、それを真似た「強欲な悪人」はバッドエンドになる。

上記の柱に当てはまる典型的な『火男』の類話を、私たちは「欲」と「無欲」が教訓として示された話についても、広い意味での『火男』の類話とみなすことにした。昔話として有名な『桃太郎』や『一寸法師』もそうであるが、「無欲」で良い行為をしていくことによって「幸福」がもたらされるが、「欲」が湧いてくると、良いことも「無」になってしまう。このような昔話を『火男』の類話として、全国にみられるものを幾つか例として、以下の表にまとめてみた。

表 3-1 『火男』の類話

	題	採集地	「無欲」な者	「欲」を持った者	結果(「無欲」な者)	結果(「欲」を持った者)
1	くっついた欲の皮	宮城県	貧乏だが仲の良い爺さまと婆さま	強欲な和尚	夢枕に婆さまが出てきて最後の別れを告げ、翌日村人が金を見つけた	ヤギの皮が取れなくなり、声もヤギになって和尚だと気づかれなかった
2	こぶとりじいさん	東北地方	左の頬にこぶを持つ良いじいさん	右の頬にこぶを持つ悪いじいさん	良いじいさんはこぶがなくなった	踊りが下手だったので鬼は腹を立て、良いじいさんのこぶを悪いじいさん左の頬にまでもつけた
3	舌切り雀	石川県	おじいさん	ばあさん	小さな葛籠いっぱいのお金銀を手に入れた	大きい葛籠をあけると魍魎魍魎が飛び出して、ばあさんは気絶した
4	おむすびころりん	不明	樹を伐りに行くお爺さん	隣に住む怠け者の爺さんと婆さん	小判の山を手に入れた	ネズミがネコの鳴き真似を怖がって逃げた時に葛籠を奪ったが、ネズミに見つかり、嘔み付かれて何も持たずに退散した
5	花咲かじいさん	岩手県 岐阜県	正直じいさん	意地悪いさん	大判小判が出てきた 金銀が出てきた 破格の褒美を貰った	ガラクタが出てきた 汚いゴミばかり出てきた 灰が大名の目に入り無礼者として牢につながれた

※表 3-1 の 1~5 は「まんが日本昔ばなしデータベース」〈<http://nihon.syoukoukai.com>〉による  
(最終閲覧日：2019年8月11日)

### ① 「継子と継母」について

「欲」と「無欲」に関する昔話について、伊豆の昔話を調べていくうちに、伊豆に多くみられる「継子と継母」の話も『火男』と同じ話の構造をしているのではないかと気づき、まとめてみることにした。

この話は大きく3つの柱からなっている。

1. 継母が実子を可愛がり、継子をいじめる。
2. 継子に何か良いことが起きる。
3. 継母には良くないことが起きる。

上記に当てはまる伊豆の「継子と継母」の類話を調べたところ、16話ほど認めることができた。

## ②伊豆にみられる「継子と継母」の類話

### 1) 『手無しの継子』(賀茂郡稲取町)

- ・ 継母が継子の手を切って山に追いやった。
- ・ 継子はいい男の人と結婚し、子を産んだ。
- ・ 継母の手が継子の手になった。

### 2) 『おふじとおたま』(賀茂郡稲取町)

- ・ 継母が実子のおたまを可愛がり、継子のおふじに辛くあたった。
- ・ 大名が来ておふじを大変気に入った。
- ・ おたまは大失敗をして大名を怒らせた。

### 3) 『継子と地蔵』(賀茂郡竹麻村・現南伊豆町)

- ・ 継子に穴のあいた袋を、実子に普通の袋を渡して椎拾いに行かせた。
- ・ 継子は袋のせいで帰れずお地蔵さんの所に泊まると、お地蔵さんに鬼が来るから鳥の鳴き真似をしろと言われ、鳴きまねをした。
- ・ 鬼は逃げて宝を残して去った。

### 4) 『継子と大豆』(賀茂郡竹麻村・現南伊豆町)

- ・ 豆蒔きの時に、継子には炒り豆、実子には本物の豆の種子を渡した。
- ・ なぜか実子よりも継子の方が、たくさん豆が採れた。
- ・ 継母は改心して継子に謝った。

### 5) 『継子と竹笛』(賀茂郡竹麻村・現南伊豆町)

- ・ 継子が父に針箱とかんざしを買ってきてくださいと言うと継母は非常に怒って娘を殺して畑に埋めた。
- ・ そこから竹が生えてきて父がその竹で笛を作った。
- ・ その笛から継子の声が聞こえてきた。

### 6) 『継子と竹笛』(田方郡西豆村小下田・現土肥町)

- ・ 父の留守中、継母は継子を釜の上にある鎌を取りに行かせ、継子が釜の中に落ちて死んでしまった。
- ・ そこから竹が生えてきたので虚無僧に売り、虚無僧は笛を作った。
- ・ 父が帰ってきて、継母は継子が遊びに行った、と言ったが、父が待っても継子は帰ってこないで、父が調べたところ真相が分かり、継母は罰せられた。

### 7) 『まますいじめ』(修善寺町柏久保)

- ・ 継子が栗拾いに行っても穴のあいた袋を持たされ、いっぱいにならないでいじめられていた。

- ・父が旅の間に継母が継子を殺して埋めると、そこから竹が生えてきた。
- ・父が帰ってきてその竹で笛を作るとその笛がしゃべり、継母の悪事が発覚してしまった。

8) 『まま子とへび』(西伊豆町仁科字大浜)

- ・継母が継子に弁当を背負わせて山にいる父のところへ行けと言った。
- ・継子が大きな蛇に遭って、父が助けようと家にマサカリを取りに行った。
- ・父が戻ってきたら蛇は継子を食べてしまっていて、父は諦めて帰った。

9) 『まま子のくりひろい』(西伊豆町仁科字大浜)

- ・継母が継子に穴のあいた袋、実子に普通の袋を渡して栗拾いに行かせた。
- ・実子は袋がいっぱいになり帰ろうとしたが、継子は袋がいっぱいにならずに帰れなかったので、実子は身代わりになり、継子に袋いっぱい栗を、自分が穴のあいた袋を持って帰った。
- ・継母は栗を拾わなかったことに怒って殺したが、それが実子だと分かり、継母も自殺してしまった。

10) 『まま子と毒まんじゅう』(戸田村舟山)

- ・継母が継子を殺そうと思い、毒まんじゅうを作った。
- ・父がそれに気づき、田んぼに捨ててしまった。
- ・後でその田んぼの持ち主が毒まんじゅうを割ってみると、中にはとかげが入っていた。

11) 『まま子の栗ひろい』(戸田村舟山)

- ・継母が継子には穴のあいた袋を、実子には普通の袋を渡して栗ひろいに行かせた。
- ・継子は袋に栗を入れるが落ちてしまい、実子がそれを拾って自分の袋に入れていった。
- ・実子は袋がいっぱいになり帰ってきたが、継子は帰ってこなかった。

12) 『継子と魚』(南伊豆町子浦)

- ・継母が継子に魚の頭を与えると、継子が私はお頭さんだねと嬉しそうに食べた。
- ・継母は怒り、今度は尻尾を与えると、私は玉さんだねと嬉しそうに食べた。
- ・今度は魚の真ん中を与えると、黙って食べた。

13) 『糠埋め米埋め』(田方郡大仁町)

- ・継子と実子がけんかをしていた。
- ・継母は実子を米の中に、継子を糠の中にお仕置きで入れた。
- ・継子は平気だったが、実子は冷たくて死にかけた。

14) 『継子と水汲み』(田方郡大仁町)

- ・継母が継子にはザルで水を汲ませ、実子には手桶で水を汲ませた。
- ・実子の手桶の底が抜けた。
- ・継母が水を汲まなかった方を叱ろうとしたら、継子の方が水を多く溜めていて、がっかりした。

15) 『継子の木の実拾い』(田方郡大仁町)

- ・実子は普通の袋を、継子は穴のあいた袋を持って木の実拾いに行った。
- ・木の実拾いをしているうちに日が暮れてしまった。
- ・継子は自分の袋から落ちた木の実をたどって家に帰れたが、実子は帰れなかった。

16) 『継子と魚』(田方郡大仁町)

- ・継母が継子に魚の頭を与えると、継子は頭になったと喜んだ。
- ・悔しいから尻尾を与えると、継子は跡取りになったと喜んだ。

表 3-2 伊豆の「継子と継母」の類話

	題	採集地	「無欲」 な者	「欲」を 持った者	結末(「無欲」な者)	結末(「欲」を持った者)
1	手無しの継子	賀茂郡 稲取町	継子	継母	手も治り、いい男の人 と結婚した	手がなくなってしまった
2	おふじと おたま	賀茂郡 竹麻村	継子 (おふじ)	継母と実 子(おた ま)	大名に気に入られた	実子が大名を怒らせてし まった
3	継子と地蔵	賀茂郡 竹麻村	継子	継母	大金持ちになった	記述なし
4	継子と大豆	賀茂郡 竹麻村	継子	継母	たくさんの大豆が手 に入った	改心して継子に謝った
5	継子と竹笛	賀茂郡 竹麻村	継子	継母	殺されて畑に埋めら れた	記述なし
6	継子と竹笛	田方郡 西豆村 小下田	二人の継 子	継母	釜の中に落ちて死ん でしまった	継子を殺したことが判っ て罰せられた
7	まますいじ め	修善寺 町柏久 保	継子	継母	継母に殺されて埋め られた	継子を殺したことが判っ て罰せられた
8	まますとへ び	西伊豆 町仁科 字大浜	継子	継母	蛇に飲み込まれて死 んでしまった	記述なし
9	まますのく りひろい	西伊豆 町仁科 字大浜	実子	継母	巡礼者になった	実子を殺した恋しさで自 殺した

10	ママ子と毒まんじゅう	戸田町 舟山	継子	継母	父にまんじゅうを捨てられた	継子を殺せなかった
11	ママ子の栗拾い	戸田町 舟山	継子	継母	山から帰ってこなかった	実子が山から帰ってきた
12	継子と魚	南伊豆 町子浦	継子	継母	魚の腹を食べることができた	継子に魚を全部あげてしまった
13	糠埋め米埋め	田方郡 大仁町	継子	継母	何でもなかった	実子は死にかけた
14	継子と水汲み	田方郡 大仁町	継子	継母	実子よりも水を汲み取った	記述なし
15	継子の木の实拾い	田方郡 大仁町	継子	継母	家に無事に帰ることが出来た	実子は帰ってこなかった
16	継子と魚	田方郡 大仁町	継子	継母	魚の頭と尻尾を食べることができた	魚を継子にあげてしまった

※表 3-2 の 1~6 は松原正明(1994)『新版 静岡伝説昔話集』(下巻)pp,136-141 羽衣出版による

※表 3-2 の 7 は鈴木暹編(1975)『伊豆の昔話』第二号 p.15 長倉書店による

※表 3-2 の 8 は鈴木暹編(1976)『伊豆の昔話』第六号 pp.6-8 長倉書店による

※表 3-2 の 9 は鈴木暹編(1976)『伊豆の昔話』第六号 pp.15-17 長倉書店による

※表 3-2 の 10 は鈴木暹編(1976)『伊豆の昔話』第八号 pp.8-9 長倉書店による

※表 3-2 の 11 は鈴木暹編(1976)『伊豆の昔話』第九号 p.15 長倉書店による

※表 3-2 の 12 は鈴木暹編(1979)『伊豆の昔話』第十一号 p.9 長倉書店による

※表 3-2 の 13 は鈴木暹編(1992)『伊豆の昔話』第十六号 p.7 長倉書店による

※表 3-2 の 14,15 は鈴木暹編(1992)『伊豆の昔話』第十六号 p.8 長倉書店による

※表 3-2 の 16 は鈴木暹編(1992)『伊豆の昔話』第十六号 p.10 長倉書店による

表 3-3 「継子と継母」の類話

	題	採集地	無欲」な者	「欲」を持った者「	結末(無欲な者)	結末(欲を持った者)
1	継子と六月息子	山梨県	継子	継母と実子	いいところにお嫁に行行った	雪の下で凍え死んだ
2	お月とお星	宮城県	継子と実子	継母	お月様とお星様になった	記述なし
3	馬追鳥	岩手県	継子と実子	継母	馬追鳥になった	記述なし
4	皿盛山	兵庫県	継子	継母	若殿様の奥方になった	実子は奥方になれなかった

5	継子のイチゴとり	福井県	継子	継母と実子	イチゴをかごいっぱい拾えた	イチゴがへビやカエルになった
6	栗拾い	静岡県	継子	継母と実子	宝物を手に入れた	蛇や百足に食われて死んだ
7	姥っ皮	新潟県	継子	継母	金持ちの若旦那と結婚した	記述なし

表 3-3 はフジパン「民話の部屋-継子の試練」〈<https://minwa.fujipan.co.jp/s/genre/mamako>〉  
(最終閲覧日：2019年8月11日)による

## ② 伊豆にみられる「継子と継母」類話の考察

伊豆には典型的な『火男』の類話が1つも見つからなかったが、『火男』の話と同じような「欲」と「無欲」に関する類話「継子と継母」の話を非常に多く認めることができ、ここに伊豆の昔話の特徴があると感じたため、それを中心に分析してみた。

まず、伊豆にみられる「継子と継母」の内容を調べてみると、「欲」を持った人物である継母が不幸な結末になり、それに対して「無欲」な人物である継子は幸せな結末になる、という一般的な展開に関しては、全国の類話と共通している。ただ、出現率としてはやはり高く、それをまとめたのが表 3-2 である。全部で 16 話が認められた。なぜこのように多く見られるのか。その理由の 1 つとして伊豆半島には自然災害が多く、その被害により死傷者が多く出て、その結果、他の地域よりも欠損家族が多いのではないかと推測できた。『うぐいすの里』の考察でも述べたように、伊豆半島は 100 万年前にフィリピン海プレートによって本州に衝突してできた関係で、地震や火山活動が活発であり、それに伴う津波や土砂崩れなどの自然災害が古くから頻繁に発生していた。

昔話が定着しだした 1200 年ほど前の西暦 800 年から 2000 年までに伊豆を震源として起きた巨大地震は 9 回、さらに周期的に起きる東海地震はもちろん、神奈川県西部や遠州灘など、伊豆周辺で起きた巨大地震も数多く記録されている。このうち、西暦 841 (承和 8) 年、伊豆地震(M7.0)や 1619 (元和 5) 年、高田領大地震(M7.7)などでは津波や土砂崩れが発生し、死者も多数出たという。

伊豆半島はリアス式海岸であるため平地は少なく、急峻な山が海岸まで迫っている箇所が多い。そこで、災害が起ると甚大な被害が出やすい。それらによって実の親子が死に別れてしまい、継子と継母と一緒に生活しなければならないケースが多くなったことで、昔話に「継子と継母」の話が出現する機会が増えたのかもしれない。あるいは、自然環境や社会環境等が厳しい伊豆半島に住む人々が、何らかの事情でこの種類の話未来の世代に教訓として残すべきと判断したために増えたのではないかと考察した。

また、注目すべきことは、伊豆の「継子と継母」の中にはいくつか「欲」を持った者が不幸な結末にならず、「無欲」な者が幸せな結末にならないパターンも存在するという点でもある。この理由についても前述したように、未来の世代に教訓として残すべきだと判断したからではないかと考えた。つまり、「無欲」な者でもその徳が報われずに不幸な結末となること、人間は慎ましく生きていようと自然災害などを前にしては無力で敵わないこと、人生は思い通りにならない理不尽なものであること、特に伊豆半島で生活する過酷さを、教訓として暗に伝えようとしていたのではなかったかと考えた。



## 4.まとめ

### (1) 昔話にみる日本人の伝統的な精神構造の考察

以下、本研究で昔話をもとに調査分析した結果を踏まえ、以下の4点に分けて日本人の伝統的な精神構造について考察する。

#### ① 女性的な包み込み

河合(1982)が指摘するように、日本人の中に流れる精神というのは極めて女性的性格にもとづく包容力であると感じた。外国、特に西洋の昔話は「強い男性像」(男性が主役や救世主になる)が描かれているが、日本は制度的に男性社会でありながら、女性を大切にしており、昔話では女性の主人公としての活躍(日本では女性の優しさや美しさが救世主になるということ)が強調され、さらに出来事の全てを母親的な受容の精神で包み込んでいたように感じた。

#### ② 自然への敬意

日本の昔話の中では、女性や自然の美が宝物のように存在しているように感じた。特に、人為が及ばない自然を崇拝する気持ちが表れており、昔から、自然を美として大切に思い、愛する心が非常に強かったことがわかる。また『鶴女房』のように動物が人間に変化することができるということから、そこに籠められた自然への敬意こそが、日本人の根底に流れる精神の1つとして見ることができるかもしれない。

#### ③ 「無欲」が美德

河合(1982)も指摘していることであるが、「無」という概念が非常に強い。例えば、話の結末が「ハッピーエンド」にならずにほとんどが「元に戻る」。また、『火男』からわかるように、日本の昔話は「欲を持つ」、「下心がある」ということに対する反発が強く表現されていることが多く、成功するのは「無欲」という状態であることが美德として強調されているように思われる。それは、「自然体」という生き方、考え方が示されているとも言える。仏教的な背景を含め、「無」や「盛者必衰」、「無常」などの概念を常に意識し、それが人生であると教えていると考えられる。すなわち、日本の昔話は「無欲」こそが日本人の伝統的な最高の精神美や美德であり、「無欲」に繋がる「慎ましさ」、「謙虚さ」が大切である、と伝えようとしているのではなかろうかと考察した。内にある欲望や醜い心を持ってはいけないと強調するのである。

#### ④ 万物を同等とみなす心

日本の昔話には、万物が人間と同等に並び、どんな存在であっても大切にすべきだと考える姿勢が強

く感じた。すべてのものには意味があり、すべてを大切にしなければいけないということを基本にしているように思われる。障害ある子どもや大人、人間以外の生物まで大切にしていけることを基礎にしており、その結果として、人間の幸福を獲得するという展開が多くの昔話に見受けられた。

## (2) 伊豆の昔話に見られる伊豆の人々の伝統的な精神構造の一側面に関する考察

### ① 自然に対する無力感

『うぐいすの里』、『鶴女房』、『火男』の3作品の類話の考察では、伊豆の人々は自然をおそれ、自然に対して無力であることが強調されていた。つまり、精神構造には、伊豆の過酷な自然環境が影響しているということが共通して言える。『うぐいすの里』の類話では、一般的な鶯の代わりに蛇が登場し、『天人女房』や「継子と継母」では、日本各地に多くみられる本来の結末とは異なった結末になる話が存在する。これらは、伊豆の特徴的な地形や厳しい自然災害等がもたらす過酷な生活によるものと考えられる。

### ② 自然への敬意

伊豆の人々は自然に苦しめられてきたが、その一方で日本全国と同様に、自然への敬意を持っていたと考えられる。伊豆にも動物が人間に変化して現れる『うぐいすの里』の類話が存在していた。さらに、その『うぐいすの里』の考察でも述べたが、蛇にはプラスとマイナスの二面性があり、この二面性は自然災害においても言えることから、伊豆の人々は自然の「マイナス」の面に苦しめられるだけではなく、「プラス」の面にも目を向け、自然を大切に思ってきたのではないかと考えた。

### ③ 理不尽を受容する心

①でも少し述べたが、『鶴女房』の伊豆に存在する類話の『天人女房』の結末は、『鶴女房』本来の「無」が生じるという結末とは異なり、長者(男)が家や召使いを失うというものであった。これもまた、「無」が生じるという一般的な結末では終われない、伊豆の過酷な自然環境を強調するための先人たちの工夫であると考えられた。また、『火男』の伊豆に存在する類話である「継子と継母」の話の一部には、「無欲」な者が幸せになるという一般的な結末と異なり、「無欲」な者が幸せにならないという結末の話が存在した。『天人女房』と同じように、結末が異なることで、人間は慎ましく生きていようと自然災害などを前にしては無力で敵わないこと、人生は思い通りにならない理不尽なものであり、それを受容しながら生きていくことが伊豆に暮らす人々の隠された教訓として示されていると考えた。

### ④ 万物を同等とみなす心

日本の昔話に強く感じられる、どんな存在であっても大切にすべきだと考える姿勢は、伊豆の人々にも共通して言えるであろう。『火男』の類話である「継子と継母」の話では、実子を可愛がり継子をいじめる継母（どんな存在であっても大切にしようとししない者）は不幸になる。このような「継子と継母」の類話は、伊豆には多数存在する。つまり、伊豆の人々も日本全国と同様に、万物が人間と同等に並び、全てのものを大切にしようとする姿勢を持っていたのではないかと考えた。

### （3）昔話を読み聞かせることで育まれる子どもたちの自我形成に関する一考察

最後に、外国と日本、そして伊豆の昔話を読み聞かせられて育つ子どもたちへの自我形成において、どのような精神的影響の差を与えているのかについて、教育的、保育的な面から考察する。

洋の東西を問わず、世界中至るところで子どもたちは、絵本の読み聞かせを通して昔話と触れ合ってきた。ここでまず、「読み聞かせ」が子どもにもたらす効果について考察を試みる。

脳医学を学習面にも応用している脳神経外科医の林成之（2011）は、多くの言葉を記憶するのを助ける脳の神経細胞「海馬回」について、「脳は、情報が多角的に重なることで、より強く記憶する仕組みを持っています。（中略）海馬回には、複数の情報が入ることで興奮し、その機能が高まるという特質があります。」と述べている。つまり、「文字」、「声」、「絵」の3つの要素が含まれている「絵本の読み聞かせ」は、海馬回の機能を高め、記憶力を向上させるという。

また、一般的に昔話が勧められるのは、昔話には子どもたちに伝えたい道徳心や教訓があるからである、という指摘がある。外国と日本の昔話を読み聞かせることの効果について、坂本聰（2016）は、日本の昔話は結論が1つではない、と言う。外国の昔話はハッピーな結末を迎え、最後に教訓がはっきりと出てくるものが多いと指摘した上で、それに比べて日本の昔話は、情景の中で物語が進むとその中になんとなく教訓めいたものが入っていて、最後もなんとなく終わるものも多い、と述べている。さらに、河合（1982）も同様のことを示している。

これらの指摘は、日本の昔話にはある意味で答えがなく、結論が1つではないと主張する。つまり、外国の昔話を読み聞かせすることでは、そこに示された教訓を学ぶことができるが、日本の昔話を読み聞かせすることでは、物事の多面性や、答えはひとつではないということを経験することができ、さらにそのような話から、はっきりと示されていない教訓を考え、読み取ることで読解力や表現力を養うこともできるのではないかと指摘しているのである。

では、具体的に外国と日本の昔話を読み聞かせることによる自我形成への精神的影響はどのようなものなのか。河合隼雄（1982）『昔話と日本人の心』を参考にして、私たちの調査結果をまとめて考察すると、以下のようなことになる。

#### 外国人（特に西洋人）

ハッピーエンドと罪と罰の因果が強調される外国の昔話の読み聞かせにより、子どもたちは正義感を

持って自立的に生活していけば、たとえ困難があってもそれに挑む姿勢を持つことで、最後には必ず乗り越えて幸福が訪れる、という伝統的価値観を受容する自我イメージが形成され、ロマンを持ち自立的で積極的な姿勢や行動が育まれていく。

## 日本人

母なる自然の構成物として全ての生き物を同等に捉え、人間の営みに関しても、良くも悪くもその世界観の中で、無から有、そして無に還るという展開の日本の昔話を読み聞かせていくことにより、勧善懲悪を尊ぶ姿勢はあるものの、最後には自然に対して無力であると悟り、その儚さを包み込み、受容して生きることが美德とされる伝統的価値観を受容する自我イメージが形成され、個を主張するよりも無欲を重んじ、自然を含む周囲との調和を図っていこうとする姿勢や行動が育まれていく。

## 伊豆の人々

基本的に日本全国に見られる昔話の特徴を示しながらも、人々の過酷な生活環境に翻弄される結末の内容を含んだ昔話を読み聞かせることで、原則的には日本人一般に見られる価値観と大差はないが、主に地形の成り立ちからくる過酷な生活環境の中で、自然を前に無力だと強く感じて生きていく自我イメージが形成され、清く正しい心や生き方が、必ずしも清く正しい結果にはならないという過酷な事実を教訓としながら、すべてを受容していく姿勢や行動の一面性が育まれていく。

## 5. おわりに

本研究では、日本人特有の精神構造が伊豆の昔話にも同様に見られることを追認検証した上で、その特徴が比較的明確に表れているとされる日本の代表的な昔話『うぐいすの里』、『鶴女房』、『火男』の3作品に焦点をあて、その類話と、伊豆に伝わる類話とを比較し、共通点と相違点を挙げて考察した。また、あわせて外国と日本、日本と伊豆の昔話を読み聞かせられて育つ子どもたちへの自我形成において、どのような精神的影響の差を与えているのかについても、教育的、保育的な面から考察を試みた。その結果、厳しい自然環境に由来すると思われる自然に対する無力感や理不尽を受容する心など、伊豆の人々の精神構造の一面が、昔話の展開に垣間見られていたのではないかと考えた。

反省点や今後の展望として、今回は3つの話を中心に調査分析したが、また違った日本人特有の心理構造が現れている昔話も存在する可能性があるため、今後は本研究では扱うことができなかった様々な昔話のパターンでも比較してみたい。さらに、昔話のもとになっている日本の神話との関連性についても考察してみたいと考えている。

## 参考文献および参考資料

### 1. 「研究目的および方法」

- ・河合隼雄(1982)『昔話と日本人の心』岩波書店
- ・関敬吾(1979)『日本昔話大成』第1巻 角川書店
- ・松原正明(1994)『新版 静岡県伝説昔話集』(上巻)羽衣出版
- ・鈴木暹編(1975)『伊豆の昔話』第一号 長倉書店

## 2. 「結果と考察」

### (1) 『うぐいすの里』

- ・松原正明(1994)『新版 静岡伝説昔話集』(下巻)羽衣出版
- ・鈴木暹編(1975)『伊豆の昔話』第二号 長倉書店
- ・鈴木暹編(1975)『伊豆の昔話』第四号 長倉書店
- ・鈴木暹編(1976)『伊豆の昔話』第八号 長倉書店
- ・鈴木暹編(1975)『伊豆の昔話』第一号 長倉書店
- ・「龍崎の蛇くたり 南から来た火山の贈りもの 伊豆半島ジオパーク」  
〈<https://izugeopark.org/geosites/jakudari/>〉(最終閲覧日:2019年7月17日)
- ・「龍鱗:甲人の塔(静岡県賀茂郡松崎町)」〈<http://www.hunterslog.net/dragonology/DS/22305c.html>〉  
(最終閲覧日:2019年7月17日)
- ・「日本の過去1000年以上の地震年表で、日本の地震の傾向がかなり分かる件:永井孝尚の写真ブログ:  
オルタナティブ・ブログ」  
〈<https://blogs.itmedia.co.jp/mm21/2011/05/post-cb18.html>〉(最終閲覧日:2019年7月20日)
- ・「成り立ち 南から来た火山の贈りもの 伊豆半島ジオパーク」  
〈<https://izugeopark.org/about-izugeo/intro/>〉(最終閲覧日:2019年7月25日)
- ・「『神の使い』とも言われるへび そのご利益と魅力についてご紹介 GOLDDUST」  
〈<https://golddust.jp/snake-fujitamakoto/>〉(最終閲覧日:2019年7月25日)

### (2) 『鶴女房』

- ・鈴木暹編(1975)『伊豆の昔話』第三号 長倉書店
- ・南国伊豆観光推進協議会(1985)『南国伊豆の昔話』社団法人下田青年会議所.
- ・高木昌司「天人女房/白鳥処女」〈[https://seijo.repo.nii.ac.jp/?action=repository action common download&item id=3149&item no=1&attribute id=22&file no=1](https://seijo.repo.nii.ac.jp/?action=repository%20action%20common%20download&item%20id=3149&item%20no=1&attribute%20id=22&file%20no=1)〉(最終閲覧日:2019年8月13日)
- ・高木昌司「逆さ読み『風土記』逸文 近江国 天人女房」  
〈<http://blog.livedoor.jp/eastasian/archives/1584209.html>〉(最終閲覧日:2019年8月13日)
- ・藤原良継 Wikipedia 〈<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/藤原良継>〉(最終閲覧日:2019年8月13日)
- ・小野東人 コトバンク 〈<https://kotobank.jp/word/小野東人-1063868>〉(最終閲覧日:2019年8月13日)
- ・静岡県立中央図書館 資料に学ぶ静岡県の歴史『貴族が流された国 伊豆～承和の変と応天門の変～』  
〈<https://www.tosyokan.pref.shizuoka.jp/data/open/cnt/3/50/1/ssr1-12.pdf>〉

(最終閲覧日：2019年8月13日)

- ・伴善男 Wikipedia 〈<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/伴善男>〉(最終閲覧日：2019年8月13日)

### (3) 『火男』

- ・松原正明(1994)『新版 静岡伝説昔話集』(下巻) 羽衣出版
- ・鈴木暹編(1975)『伊豆の昔話』第二号 長倉書店
- ・鈴木暹編(1976)『伊豆の昔話』第六号 長倉書店
- ・鈴木暹編(1976)『伊豆の昔話』第八号 長倉書店
- ・鈴木暹編(1976)『伊豆の昔話』第九号 長倉書店
- ・鈴木暹編(1979)『伊豆の昔話』第十一号 長倉書店
- ・鈴木暹編(1992)『伊豆の昔話』第十六号 長倉書店
- ・「静岡県に被害をもたらした主な地震と日本で近年おきた主な地震」  
〈[https://www.pref.shizuoka.jp/bousai/e-quakes/manabu/why/documents/kakozisinichiran\\_pdf.pdf](https://www.pref.shizuoka.jp/bousai/e-quakes/manabu/why/documents/kakozisinichiran_pdf.pdf)〉  
(最終閲覧日：2019年8月11日)
- ・「静岡県の地震活動の特徴」〈[https://www.jishin.go.jp/regional\\_seismicity/rs\\_chubu/p22\\_shizuoka/](https://www.jishin.go.jp/regional_seismicity/rs_chubu/p22_shizuoka/)〉  
(最終閲覧日：2019年8月12日)
- ・「鎌倉期から江戸初期における地震災害情報」〈[http://www.histeq.jp/kaishi\\_23/23\\_051.pdf](http://www.histeq.jp/kaishi_23/23_051.pdf)〉  
(最終閲覧日：2019年8月12日)

## 3. 「まとめ」

- ・河合隼雄 (1982)『昔話と日本人の心』岩波書店
- ・河合隼雄 (1994)『昔話の深層 ユング心理学とグリム童話』(講談社+α 文庫)
- ・河合隼雄 (2003)『神話と日本人の心』岩波現代文庫
- ・北山修(2017)『定版 見るなの禁止—日本語臨床の深層』
- ・林成之 (2011)『困難に打ち勝つ「脳とこころ」の法則—ゾーンと海馬があなたを強くする—』祥伝社
- ・坂本聰 (2016)『国語が得意科目になる「お絵かき」トレーニング』ディスカヴァー・トゥエンティワン
- ・稲田浩二・稲田和子編 (2010)『日本昔話ハンドブック 新版』三省堂
- ・稲田浩二 (2004)『世界昔話ハンドブック』三省堂
- ・景山聖子『絵本は人生のリハーサルのか？ ユング心理学が裏付ける昔話の力と「生きる知恵」を授ける読み聞かせ。』〈<https://kodomo-manabi-labo.net/series-seiko-kageyama-storytelling-12>〉  
(最終閲覧日：2019年8月13日)
- ・景山聖子『「読み聞かせ」でなぜ学力が上がるのか？ 絵本がもたらす「驚きの効果」』〈<https://kodomo-manabi-labo.net/series-seiko-kageyama-storytelling-02>〉(最終閲覧日：2019年8月13日)
- ・日本の伝統精神とは～日本昔話から考える～ 松下政経塾〈<https://www.mskj.or.jp/report/2980.html>〉  
(最終閲覧日：2019年8月14日)